

第2回古儀式派研究国際会議（「外国における古儀式派教徒。歴史、宗教、言語、文化」）
参加報告記

塚田 力

2012年9月6～7日に、ポーランド中西部トルン市のニコライ・コペルニクス大学で開催された第2回国際古儀式派研究国際会議（「外国における古儀式派教徒。歴史、宗教、言語、文化」）に参加した。この会議はポーランドにおける古儀式派研究の中心であるコペルニクス大学スラヴ言語・文学研究所によって主催され、また、国際スラヴィスト会議の古儀式派研究部会の研究会も兼ねていた。同研究所に在籍するポーランドにおける古儀式派研究の第一人者であるE・イワネツ教授の80歳を記念する研究会であった。

現在もポーランド共和国のリトアニア国境近くのスヴァウキ郡には古儀式派沿海派の古い共同体が存在しており、古儀式派はポーランドの伝統的少数宗教として認知されている。また、ハバロフスクから参加したI・シェブニン氏の報告によれば、ポーランドの軍事アタッシュェが1939年の全ポーランド古儀式派大会への招待状をハルビンの古儀式派ベロクリニツキー派教会のイオアン・クドリン長司祭に手渡している。このように、ポーランドと古儀式派の関わりは300年を超える深いものであり、かつ、グローバルな様相を帯びている。

今回大会では37本の報告があり、ロシアを中心にエストニア、リトアニア、ポーランド、ドイツ、ウクライナ及び日本から約50名の研究者が参加した。日本からの参加者は天理大学の阪本秀昭教授及び筆者の2名であった。発表分野については、言語学に関する報告がおおよそ半数を占めていた。古儀式派関連の国際的な研究集会では言語学者が多数参加しているのが通例である。その他、文学、歴史学、神学などについての報告があった。『外国における』と題する研究会だけに、ポーランド、ルーマニア、エストニア、ラトビア、リトアニア、ウクライナ、オーストラリア、中国、アメリカ、カナダ、ブラジル及びボリビア等の世界各地の古儀式派が対象とされていたが、ロシア関連の報告も見られた。

初日、会議の冒頭はイワネツ教授の生涯及び業績の紹介がなされ、イワネツ教授自身による記念講演が行われた。



全体会議の様子

その後、言語学中心と思しき部会及び歴史・文学・教理等の部会の 2 つの会場に別れセッションが開始された。筆者が参加できた報告を以下にいくつか紹介したい。

モスクワ大学のアゲーエヴァ教授は近年のオレゴン州の礼拝堂派教徒の間でのイコンにおける十字を画く際の指の組み方についての論争について報告を行った。1980年代、古いイコンの一部で見られる 2 本指ではない十字の形を間違っただけのものや、そのようなイコンを鋳潰すなどして破棄しようとする「アドナクレスニキ」と、伝統的な理解に立つ「ドゥブクレスニキ」の間で論争が始まった。現在までの古儀式派の全ての教派は（そして主流派のロシア正教会も同様に）後者の立場に立っており、「アドナクレスニキ」の主張は歴史上類例を見ないものであるという。論争は世界各地に波及しており、例えば、礼拝堂派の間で権威を有するシベリア連邦管区クラスノヤルスク地方のドゥブチェス修道院は「ドゥブクレスニキ」を支持して古いイコンを使用し続けている。この論争は深刻な対立をもたらしており、アメリカの礼拝堂派は分裂にいたっている。

旧満州及び新疆に関するセッションも開かれ、阪本教授、上述のシェブニン氏及び筆者が報告を行った。塚田は、古儀式派無僧派の一派である救世主派（スパソフツィ）の、新疆及び新疆から南北アメリカ大陸へ移住した後の動向について文献資料、現地調査及び聞き取りに基づき及び報告した。ブラジルの救世主派の村落名を挙げたところ、会場からモスクワのロヴノヴァ氏及びゴノボブレヴァ氏からその村に行ったという声が上がった。両氏からは南米各地の古儀式派共同体について具体的な話を伺うことができ非常に有益であった。阪本教授からは満州の古儀式派教徒が多数居住していた横道河子及び三河地方における白系露人事務局に地方支部の活動について報告がなされた。対ソ静謐策が取られるようになった 1941 年以降、白系露人の自治を強める方向へ地方支部の活動は進んだという。

その後の質疑応答では、ロシア国外の古儀式派に詳しい諸氏から多くの突っ込んだ質問があり、他の研究会ではなかなか見られない大変な盛り上がりであった。

その後、サランスクのユルチェンコヴァ氏による「ドゥホボール派の過去と現在：カナダ社会への統合」を拝聴した。実はドゥホボール派は古儀式派には含まれないのではあるが、この国際会議における発表は認められていた。ドゥホボール派のカナダの西部諸州への移住の経過を中心に発表がなされ、会場からはドゥホボール派全般についてさまざまな質問が行われていた。同氏によれば、古儀式派と違い、ドゥホボール派あるいは霊的キリスト教について特化した学会や研究会などは存在しないのではないかとのことであった。

ドイツのスウィンブルンの若手の大学院生のシェル氏は、英語で「オーストラリアディアスポラの宗教及び移民についての記憶」を発表した。同氏はメルボルン、シドニー及びヤーウン（オーストラリア北東部クイーンズランド州にある小規模な無僧派のコミュニティー）での古儀式派への聞き取りを中心とした資料を集めている。発表者は英語が流暢で、若い世代の古儀式派にも英語で取材しているとのことであった。

その後、大学内で 30 人程度による食事会があり、多くの研究者と極めて具体的な会話をすることができた。

翌朝、宿舎のトルン大学寮から会場に向かう中で、ロシア古正教会クルスク主教座派のアポリナーリー主教と同道しお話を伺うことができた。同主教に、前日話題になっていたオレゴンでの論争について質問したところ、「百章会議で規定された形以外の指の形を禁止し、それにそぐわない古いイコンを鋳潰すなどという考えは古儀式派の歴史の中で一度も現れたことはなかったとんでもないものだ」とのご意見であった。最近のクールスク派の状況、ルーマニアでのクールスク派の新たな教区、主教の訪日経験についてなどについて説明していただいた。

会議の 2 日目はまずトルン大学のグルシコフスキ氏が司会を務めるセッションに参加し、モスクワのアケリエフ氏の「国外の古儀式派会衆に対する 1720 年から 1760 年までのロシア政府の姿勢」と題する発表から拝聴した。この時期のポーランドリトアニア連合王国への移住の様相をアーカイブ資料によって明らかにしていた。

続いてヴィリニユスのモロゾヴァ氏による「古儀式派手写本の伝統における 1751 年ポーランド教典」では、1751 年にポーランドで開かれたフェドセーエフ派の教会会議における決定のバリエーションについての調査が発表され、各テキストには差異が今まで考えられていた以上に多量に存在しているとの指摘がなされた。

ヴィリニユスのポタシェンコ氏は「ヴァシーリー・ゾロトフ（1786～1856 以降）の歴史観（『リトアニア年代記、あるいは、旧教のキリスト教の年代記』に基づく）について発表した。ゾロトフは 1847 年から 1853 年にリトアニアでこの年代記を執筆した。この彼の著作はリトアニア及びクールラントの無僧派古儀式派教徒の歴史に関する重要な資料であるだけでなく、リトアニア、ラトビア、ベラルーシ及びロシアの 4 か国にとっての重要な歴史遺産であるとの指摘がなされた。

2日目の第2セッションは、モスクワのゴノボブレヴァ氏が司会する言語学を扱うセッションに参加した。

モスクワのロヴノヴァ氏は「南米の現代古儀式派手写本に対する語彙的な注釈」と題する発表を行った。中国新疆ウイグル自治区で1959年に生まれ、南米へ移住した礼拝堂派の新疆派の古儀式派信徒により2009年から2010年にかけて執筆された『ダニール・テレンチエヴィチ・ザイツェフの物語及び生涯』で用いられている語彙のうち、一般的な読者の理解のために注釈が必要なものについて、独自の方言的語彙、一般的なロシア語の単語だが古儀式派独自の意味を持つ語彙、スペイン語からの借用語といった6つの類型ごとに分析がなされていた。中国語からの借用は見られないという。

続いて司会のゴノボブレヴァ氏自身による「南米旧教徒方言における名称付け」が発表された。南米の旧教徒はロシアから中国を経由して南米へ移住した。2006年から2009年にブラジル、アルゼンチン、ウルグアイで発表者が録音した資料に基づき、ロシア本国と切り離された環境におかれてきた南米旧教徒方言は多くの発音、語彙、統語法上の特徴を有していると指摘していた。

食事の後、カサートキン氏を議長とする国際スラヴィスト会議の古儀式派研究部会の会合が開かれた。非会員も参加及び発言が許されていた。まず、2013年10月にミンスクで予定されている国際スラヴィスト会議について説明がなされた。グシボフスキー教授から『古儀式派世界地図』作成に向けた協力が要請され、地図の具体的な形式等さまざまな問題が討議された。

その後、本国際会議の総括が行われ、閉会となった。

ロシア国外の古儀式派に焦点を当てた本国際会議には、その他の古儀式派に関する研究集会と比しても、中国に居住していた古儀式派に関心を有する塚田にとって興味深い発表が集中していた。討論も活発で刺激的であった。古儀式派の専門家が多数集まり専門的な発表を行う本国際会議に参加でき、具体的かつ有意義な情報と人脈を得ることができた。